九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

自治産業コロニー「クズバス」とリュトヘルス(7)：清算後とその総括に向けて

山内, 昭人
九州大学 : 名誉教授

https://hdl.handle.net/2324/7376539

出版情報：pp.1-28, 2025-08-04. Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

自治産業コロニー「クズバス」とリュトヘルス（7）
── 清算後とその総括に向けて ──

山 内　昭 人 （九州大学名誉教授）

はじめに
第 1 章　再編とコロプキン失脚時の最後の試み
第 2 章　外国人入植者のその後
終　章　総括に向けて
　1　その創設に関する新解釈
　2　時期区分の問題
　3　IWW 的傾向という解釈の問題点
　4　「自治」と「特性」の保持
　5　リュトヘルスの評価をめぐって
　6　清算後の発展から見た評価
　7　理想主義の看板倒れであったか？

は じ め に

本篇は，第 6 篇の続きで，最終篇となり，第 8 の付録篇が添えられる予定である。

第 1 章で扱う内容については，これまでの研究では自治産業コロニー「クズバス」（АИК-К）清算後 1927 年 10 月 1 日に「クズバス・ウーゴリ」（後述）が再編されたこととコロプキンの失脚について触れられる程度であったが，清算後もリュトヘルス（S.J. Rutgers）がベーゲマン（Begemann）を介して外国人技師の引き留め策，テリベス計画推進などを一縷の望みをつないで試みた（これまで知られることのなかった）事実が，「クズバス年譜」にもとづいて明らかにされる。

第 2 章では，最後まで АИК-К のために働いた有力スタッフを中心に彼ら入植者の「その後」の概要を記す。彼らのうち少なからぬ人たちが，クズバス・プロジェクトに類するソヴェト・ロシア国内の事業に続けて携わったり，帰国して新たな職に就いたりするも依然「新しいクズバス」を信じて期待を寄せていた。

終章では，本連載論文で扱った事項に限られるけれども，総括に向けてのまとめを行う。ただし，本連載では各篇ごとに小括を行っており，ここでのまとめに際して（新たに編集し直してのことだが）それらの小括がかなり繰り返されていることを断っておきたい。

第 1 章　再編とコロプキン失脚時の最後の試み

リュトヘルスは，АИК-К が清算される直前に「歴史的発展と新しい状況を説明するために」АИК-К の全労働者への呼びかけ文を起草し，準備したのだが（第 6 篇， 29），1926 年 12 月 27 日に一足早く（モスクワから帰路途中ロンドンにいた）バーカー（T. Barker）宛書簡にその「表明」を同封して，それを同志ソローキン（Sorokin; イギリスに戻っていた），ハーン（S. Hahn; ケメロヴォから去っていた），トム・マン（T. Mann）らに通知することを依頼した [(1)]。けれども，肝心の「表明」はケメロヴォでは公表されなっかった。現地のベーゲマンからリュトヘルスへの 1927 年 2 月 25 日 付書簡には，それは「クズバスの新聞におそらく公表されなかった。なぜならば誰もそれについて何も知らないから」とあり [(2)]，入植者にとっては突然の理解困難な清算劇であったろう。

1927 年 1 月 1 日から АИК-К は ВСНХ の管轄方式で，つまり国全体の経済システムに組み入れられて再編されることになった（第 6 篇， 26）。けれども，コロプキン（К.Н. Коробкин）のケメロヴォでの管理は長くは続かなかった。多くの外国人技師を離反させたコロプキンは，不当に管理機関を拡張し，順調な副業経営〔農業〕をうまく閉鎖し，許されない贅沢や出張で大金を浪費した。帰国したリュトヘルスのもとにクズバスからコロプキンへの不平不満の知らせが届いた。リュトヘルスはクイヴィシェフ（В.В. Куйбышев）に打電して，介入を要請した。1927 年春に労農監督人民委員部（НК РКИ）の委員会がクズバスへ派遣され，その調査結果により 5 月 1 日にコロプキンは管理者として解任され，（後述のように）6 月に党から除名され，その後逮捕され，有罪の判決を下されることになる [(3)]。

労農監督部による調査報告について，ストライク（A.G.　Struik）は 1927 年 5 月 6 日にモスクワからリュトヘルスへ以下の書簡を書き送った [(4)]。

> 生産性は絶え間なく下降して，労農監督部は 1 つの長い報告書を提出した。その中でコトリャレンコ（Д.М. Котляренко）とフート（B. Foot）は，良いと思っての若干の不要な支出があった責任を負わされ，軽い（公表なしの）「戒告」（выговор）を受

（1）　РГАСПИ, 626/1/6/64.

（2）　РГАСПИ, 626/1/6/65.

（3）　G.C. Trincher Rutgers/K. Trincher, *Rutgers. Zijn leven en streven in Holland, Indonesië, Amerika en Rusland*（Moskou, 1974）, 178; Г. Тринчер/К. Тринчер, *Рутгерс*（Москва, 1967）, 166; Г.Я. Тарле, *Друзья страны Советов. Участие зарубежных трудящихся в восстановлении народного хозяйства СССР в 1920-1925 гг.*（Москва, 1968）, 346; Л.Ю. Галкина, *Автономная индустриальная колония «Кузбасс»*（Кемерово, n.d.［2011］）, 194.

（4）　РГАСПИ, 626/1/6/66,

けた。労農監督部の委員会議長はヤンソン（H.M.　Янсон）であった。コロプキンは立坑の指導者としていかなる高い地位にも任ずることは許されず，彼の件はなおヨリ詳しく調査される。私〔リュトヘルス〕は専ら CTO とコミンテルンに頼り，他の機関をおろそかにしたと非難される。しかし，私に対していかなる告発も持ち上がらなかった。総じて今，〔クズバス・〕トラスト指導者への非常に多くの対抗措置が取られている（新聞に毎日〔報じられている〕）。

ベーゲマンのリュトヘルス宛 1927 年 5 月 12 日付書簡には，ベーゲマンへの職務引継ぎとコロプキンの解任直後の様子が伝えられていた [5]。

〔1927 年〕1 月 24 日に彼〔ベーゲマン〕は〔休暇からケメロヴォに〕戻ってきて，3 月 23 日以来新しい議長が来るまで指導している。本日彼は，クズバス・トラストのコティン（Котин）が任命されているとの電信による報告を受け取る。コロプキンは自らの職務を 5 月 7 日にベーゲマンに引き渡したが，しかしここに留まり，舞台裏で仕事をしている。

ストライクのリュトヘルス宛 1927 年 5 月 14 日付書簡によれば，BCHX のコロプキンについての〔解任〕決定が正式に報道され，加えてガフト（Гафт）の 4 年の禁固刑が報じられた [6]。その有罪判決に至った発端は，ルース・ケネル（Ruth　Kennell）の「クズバスの終焉」に詳しく書かれている。つまり，ガフトによるモスクワ事務所での専横な振る舞いが繰り返されていた時，1 女性入植者がリュトヘルスの署名がある支払請求書を呈示したのだが，リュトヘルスはもはや管理者ではないとの難癖をガフトはつけて，それを拒否した。そのことを彼女が党中央委員会に訴えたことを機に，最終的にガフトは 5 年の禁固刑を受けた [7]。

1927 年 5 月 19 日にコティンはケメロヴォに到着した [8]。そのコティンの到着および彼との重要なやり取りを，ベーゲマンは早速 5 月 27 日 にリュトヘルスへ伝えた。以下，改行を施して引用する [9]。

コティンは，様々な地域に自らが滞在する間，私〔ベーゲマン〕に代わって代理人としてゴリャチェフ（Gorjatscheff; コロプキンの代理人であった）が指図することを欲した。彼〔コティン〕はさもないとドンバス〔から〕のスペッツが彼に反対するこ

（5）　РГАСПИ, 626/1/6/67.

（6）　РГАСПИ, 626/1/6/66.

（7）　Ruth E. Kennell, “The End of Kuzbas,” *The Nation*, Vol. 128, No. 3318, 6.II.1929, 172.

（8）　РГАСПИ, 626/1/6/67. コティンはロシア労働組合出身で，クズバス・トラストが最後まで管理していたクズネツク炭田北端のアンジェロ-スジェンスキー炭鉱（Анжеро-Судженский рудник）の管理者であった。РГАСПИ, 626/1/6/64-65.

（9）　РГАСПИ, 626/1/6/67.

とを恐れたからである。

私は，精力的に抗議し，BCHX，〔党〕中央委員会，そしてコミンテルンに打電した。最終的に彼は，地方の党もまた私の指導が正しいと表明したので，譲歩した〔と言うことは，その代理人案は取り下げられた〕。

しかし私は，〔自らが代理人を務める代わりに〕むしろ技術的な仕事を好み，私にテリベスを割り当てることを提案した。コティンはそれに反対せず，ケメロヴォにやって来たシルツォフ（Sirtsoff; “Sibraykom”〔シベリア地区委員会？〕書記）との協議後，またそれを支持する用意があると（私が機械製造にやはり経験豊かであり，また溶鉱炉建造を多少理解しているので）表明した。

それからベーゲマンは，テリベスについての差し当たりの仕事に自らを委ねるためにトムスクに行き，1927 年 6 月 11 日にトムスクからリュトヘルス宛書簡を出した。そのあとケメロヴォに戻ったベーゲマンによる 6 月 21 日と 7 月 10 日の同書簡が続いた。それら 3 書簡だけでは内容の読み取りもまた確認も困難だが，ともかく改行だけを施して訳出しておく[10]。

（6 月 11 日付書簡）

ベーゲマンはレンツマン（Lentzman; テリベス事務局（ビューロー）議長）とともにグリエフスクへ行くだろう。しかし，テリベスの建造については，すでにシカゴのフライン（Freyn）社（cf. 第 4 篇, 16）とは（全体のプロジェクト化のために）契約済みだけれども，まだ何も決定していない。シルツォフは，ベーゲマンにテリベスのもとで指導的立場を任せることをモスクワで提議するだろう。

ベーゲマンは，協議のためモスクワに行くつもりであり，私〔リュトヘルス〕がコティンを仕事で 3 週間見たあとで，私が АИК-К をかなり不利であると判断する，という意見である。彼〔ベーゲマン〕はケメロヴォで技術指導者として残り，彼に完全な自由が与えられる場合は，彼の協力者を選ぶ用意があるだけであろう。

すべてがなお大そう不規則であるところのケメロヴォのための技術管理者を見出すことは，容易ではないだろう。そこでは単に技術的着想を示すだけで，どこか他の所（トムスクまたはモスクワ）でそれを完成させるシステムは，やはり自暴自棄的行為のようなものであり，仕事での大きな遅延を意味する。このシステムには一流の技師および計画の組織化という高い要求が求められる。

（6 月 21 日付書簡）

彼〔ベーゲマン〕はレンツマンとともにグリエフスクへ，それからモスクワへ行く。コティンとは彼は折り合いが悪い。というのはこの人〔コティン〕はベーゲマンと協調することなしに，絶えずまた技術問題に口出しするからである。ちょうどコロプキンと同じようだが，誠実で善良なコティンのもとでは無意識に起こるにすぎない。

（7 月 10 日付書簡）

（10） РГАСПИ, 626/1/6/67-68, 68, 68-69.

彼〔ベーゲマン〕は 7 月 15 日にモスクワに行く。ここではうまくいかない。コティンは彼の任務に対処する力がなく，私〔リュトヘルス〕は絶えず書簡によって私の異議を記録しなければならない。というのは私は深刻な難局を予期しているから。

ベーゲマンはおそらく 8 月にオランダに行くだろう。テリベスの問題は思ったより長引くので，ベーゲマンは最終的に北シベリアでの金鉱業トラストのもとに職を得るだろう。

末尾に関しては，実際ベーゲマンは 1927-29 年に当地の「ソユーズゾーロト」（Союззолото; 全ソ金鉱業株式会社）の主任技師を務めることになった[11]。と言うことは，リュトヘルスが一縷の望みをベーゲマンに託したテリベス計画は，この段階では一頓挫したことを意味する。その主な原因が 3 書簡から読み取られるだろう。つまり，①新管理者コティンは，同計画に端から反対しなかったけれども，コロプキンほどではないものの絶えず技術問題に口出して，折り合いが悪かった。②かつての АИК-К のように一流の技師たちによる計画の組織化をケメロヴォだけで実現するのは，困難な状況となってしまっていた。③モスクワでの交渉などかつてリュトヘルスが果たしていた役割を，ベーゲンマンが肩代わりするには無理があったし，有力な協力者も見出されなかった。

1927 年 6 月 20 日に国営石炭・化学・冶金トラスト「クズバス・ウーゴリ」（Кузбассуголь）の規約が СТО によって承認された。その中で，АИК-К の資産および債務が前年 10 月 1 日の決算報告に従って引き受けられることが明記された。再編された「クズバス・ウーゴリ」は，1927 年 10 月 1 日の新年度からスタートした[12]。

タルレの当該章は以下のように結ばれた。「……ウラルおよびシベリアの産業の総合的発展の重大な諸課題は，新しい組織形態が必要であることを示唆していた。コロニーのスタッフによってそれらの課題は，もちろん解決されえなかった。ソヴェト連邦の経済力の強化でもって，“АИК-К” の特別な組織形態は自らの意義を失った」[13]。

既述したように，「ロシア化」が当然視された中での，当然の論評にすぎない。

1928 年に入って 1 月 22 日，クズバス・ウーゴリの傘下に入ったケメロヴォのオランダ人土木技師スホール（G. Schoorl）からリュトヘルスへ，以下のような旧入植者にとってはプラスとマイナスの近況が報告された。「プロジェクト作業は強く制限された。詳細なプロジェクトは一部トムスクで（教授たちによって）練り上げられている。ケメロヴォでは中央立坑の容積が拡大され，コークス炉の第 3 バッテリーが改善されている。レーニンスクに対しては主要立坑が近代化され，プロコピエフスクに対しては 1 コークス・バッテ

（11） T. Schoorl Straub, *Een beetje vrijheid. Herinneringen van een Nederlandse vrouw in Siberië* (Laren, n.d.［1965］), 21.

（12） Устав Государственного каменноугольного, химического, и металлургического Треста “Кузбассуголь,” 20.VI.1927（https://docs.historyrussia.org/ru/nodes/398199#mode/inspect/page/-1/zoom/4）; Тарле, *Друзья страны Советов*, 346.

（13） Тарле, *Друзья страны Советов*, 347.

リーと化学工場が計画されている」[14]。

コロプキンの逮捕後について見ていくと，1927 年 6 月 25 日に彼は党から追放された（その件は〔労農監督部〕シベリア統制委員会の同日の決議に見られるとのこと）[15]。また 7 月 13 日の『プラウダ』には関連記事が載った。そこには，コロプキンと「自らの」40 人の部下がドンバスからクズバスへ移ってきて，高給で贅沢に暮らし，結局 8 人が刑務所行となった事件を体たらくな行為として非難するものの，具体的な説明はなく，それによって АИК-К がどれほどの被害を被ったかも書かれていない，末尾にはこうある。「我々には 1 つの疑問だけがある：誰が推薦したのか，誰がまさにそのコロプキンをトラストの支配人の責任あるポストにつかせたのか？」コロプキンを推薦したのが，他ならぬ ВСНХ 副議長ピャタコフ（Г.Л. Пятаков）であったを知っていれば，共産党中央機関紙に軽々にこのような問いかけはできなかったのではなかろうか[16]。

1928 年 2 月半ば，コロプキンら 9 名が裁判にかけられ，国有企業の管理ミス，横領，浪費，依怙贔屓，その他の犯罪により全員が禁固刑となり，刑期はコロプキンが 8 年，ガフトが先の刑期に 5 年が加えられて 10 年となった[17]。

「クズバス年譜」はこのコロプキンらの裁判終了で終わり，最後の文章はこうである。「後年にもなお私〔リュトヘルス〕は，再三再四 АИК-К 時代の仕事仲間からの書簡を〔引き続き〕再建に協力しているソヴェト連邦の各地から受け取る。彼らは相変わらずある種の強い連帯感（Zusammengehörigkeit）を抱き，かなりの人は私に対して個人的な関係を保ち続けている」[18]。

（14） РГАСПИ, 626/1/6/70.

（15） РГАСПИ, 626/1/6/69.

（16） “Калёным пером. Коробкин и другие,” *Правда*, 1927, No. 156, 13.VII.1927, 3. コロプキンの随員の浪費について補足しておけば，木製の坑内レールを鋼鉄製に取り替えたり，坑内ランプを行き渡らせたりするのに必要な資金が足りない時に，彼ら各人は 120 ルーブリもする柔らかいソファー・ベッドを購入していた。Галкина, *АИК-К*, 130.

（17） РГАСПИ, 626/1/6/71; Kennell, “The End of Kuzbas,” 172. 両者では数字の違いがあり，後者では 40 名が被告となり，うち 8 名が禁固刑となっている。

（18） РГАСПИ, 626/1/6/71.

第 2 章　外国人入植者のその後

АИК-К の清算ないしその直前まで残り続けた外国人入植者から，母国で治療中のリュトヘルスの元へ 1927 年に入って引き続き一連の書簡が届いた。彼らの消息や再編へ向けての最新情報が知らされた [(1)]。彼らの「その後」などについて概要を記しておくことにする。

ベーゲマンについては，上記ソユーズゾーロトの主任技師を務めたあと，1931 年まで同様の団体「イルクーツク」に移り，そして 1931-33 年にモスクワの運輸関係政府組織の主任技師となり，その後帰国した [(2)]。

ストライクの上記リュトヘルス宛 1927 年 5 月 6 日付書簡によれば，ストライクとシャーマーホルン（D. Schermerhorn）は，鉄道建設に関する調査研究旅行（第 6 篇, 13）から 1927 年 5 月初めにモスクワに戻ってきて，同月 29 日にトゥルキスタン–シベリア鉄道建設に携わるためセミパラティンスクに向かって発った（シャーマーホルン夫人も歯科医として同行した）[(3)]。フートも彼らのあとを追って，6 月初めには当地で彼らと合流している。フートのリュトヘルス宛 7 月 26 日付書簡によれば，フートはコロプキンらの裁判について元入植者たちから情報を得ており，またセミパラチンスクでの仕事ははかどっている様子で，シャトフ（В. С. Шатов）も仕事に満足している，と。そのように現況を知らせながらも「しかし」とフートは，以下のように依然希望を抱いていた。「我々が建築物のために 700 万〔ルーブリ〕を得たならば，我々はソヴェト国家のためにヨリ多くの利益をもたらしただろう，と彼は考える。フートの情報によれば，旧 АИК-К がコロプキン・グループによって取り換えられたことを労働者たちは今また残念に思っている。フートは，全クズバスが石炭，鉄，そして化学製品の一大コンビナートとなることをなお見ることを期待している。そこではアメリカ化が必要とされうるであろう」[(4)]。

ニューヨーク事務所の最後の管理者だったシップマン（S.S. Shipman）は，リュトヘルスに 1927 年 2 月 4 日付書簡でアムトルグ（Amtorg）に就職口を得たことを知らせた [(5)]。ハーンも遅れて就職するだろうと書かれていた当のハーンは，自らがリュトヘルスに宛てた 7 月 10 日付書簡では，まだアムトルグに就職しておらず，私的に働いているが，

（1） РГАСПИ, 626/1/6/65.

（2） Schoorl Straub, *Een beetje vrijheid*, 21.

（3） РГАСПИ, 626/1/6/66, 70.

（4） РГАСПИ, 626/1/6/69.

（5） РГАСПИ, 626/1/6/65; 第 4 篇, 19.

「しかしいかなる熱中もなしにであ」った。ハーンは「新しいクズバスを信じて待ってい」た[6]。

АИК-К 清算をベルリン事務所代表として迎えたバールス（A. Baars）は，すぐには帰国せず，1927 年 3 月から 11 月にかけてスターリノ（現ウクライナのドネツィク）の溶鉱炉技師として働き，そのあと年末に帰国し，そして時をおかず「実際のソヴェト-ロシア」を『新ロッテルダム新聞』1928 年 1 月 7 日号から 5 回にわたって連載した[7]。バールスは露語を習得した上で「ソヴェトと農民」,「国有化された産業」,「統治機構」，そして「経済状況」の 4 章で「謎めいた」ロシアを独自の視点から批判も込めて紹介している。そこから導き出された「結び」では,「学習のためのインド」と副題にあるように，特にインドを例に取って，その地にソヴェト-ロシアの共産主義プロパガンダが導入された場合，いかなる問題があるかを問うというバールスの主題が展開されている。その結論は，ロシアは何ら新しいものを提供せず，何の問題も解決しないということであった。以下，抜粋するように批判はストレートだった。「コミンテルンによって指導されたインドの共産主義者と民族主義者は，ロシア国家の代理人であり，そのために金が支払われている，ちょうどそれぞれの資本主義国家がそれぞれの共犯者に給料を払うように。ロシア国家が彼らの支援を必要とする限り，彼らは金を支払われ，支えられている。……モスクワからのすばらしいごまかしの期待によって惑わされている民族主義者と共産主義者は，そのイギリス反対闘争において彼らの国の仲間をロシアに売る」。「私は，共産主義が確かにインドのために生命の基礎ではなく，死の基礎を与えるしかできないことを明らかにしたつもりである」[8]。

その連載は物議を醸し出したのだが，入植者たち（とりわけ同胞）が問題視したのは，バールスが「共産主義者であった過去を否認している」ことであった[9]。帰国したあとウィーンにいたリュトヘルスは，早速 1928 年 1 月 18 日に反論を『新ロッテルダム新聞』編集部宛に送った。それは掲載を拒否され，オランダ共産党機関紙『トリビューネ』1 月 27 日号に投書欄扱いで掲載された[10]。それはリュトヘルスには珍しく感情的で，個人攻撃に終始したのだが，彼の言い分はこうだった。いち早く現地に赴いた土木技師バールスは，

（6） РГАСПИ, 626/1/6/69.

（7） A. Baars, *Sowjet-Rusland in de practijk. Indië tot leering*. Overdruck uit De Nieuwe-Rotterdamsche Courant van 7, 8, 10, 11 en 12 januari 1928［n.p., n.d.］, 11.

（8） Baars, *Sowjet-Rusland in de practijk*, 45-47.

（9） РГАСПИ, 626/1/6/71. バールスにはクズバスに来る前に，デルフト工科大学在学中にオランダ社会民主労働党員，〔蘭領〕インド社会民主同盟員，そしてコミンテルン・アムステルダム・サブビューローの事務所長という政治的経歴があった。cf. 山内昭人『第 3 インタナショナルへの道 ── リュトヘルスとコミンテルン創設 ── 』（九州大学出版会, 2021）, 282, 286-287, 317.

（10） S.J. Rutgres, “Laatste groet aan den Renegaat Ir. Baars,” *De Tribune*, 21e Jrg. No. 92, 27.I. 1928, 5, cf. 1.

リュトヘルスが赴く前に入植者でありながら「ケメロヴォの一部をなお支配していたかつての利権所有者の技師として雇われていた」[11]。そのことも含め，バールスは繰り返し入植労働者の反撥を招き[12]，技師仲間でも孤立していた。その上，「宣伝や教育という本来の〔共産主義者としての〕党務を常に避けてきていた」。バールスはリュトヘルスにとって「厄介な問題」だった。結局，繰り返し求められたバールスの解雇や除名にリュトヘルスが応じなかったのは，ひとえにバールスの技術力とその知識が頼りになったからである。バールスは自らを過大評価し，1926–27 年にリュトヘルスが職務を遂行できなくなった時，「自らが後任に指名される人物であると大まじめに主張した」。〔そのこともあってであろうか，リュトヘルスは 1926 年 7 月バールスをベルリン事務局の後任代表に指名したことについても（第 6 篇， 19），にわかに信じがたい以下のような説明をしている。〕「バールスはケメロヴォの全労働者から遠く離れてベルリンに配置されるが，しかしこのポストはそれから廃止され，彼の解雇が続くはずだ」と考え，働きかけた，と。

以上，バールスの思考や行動には最初から問題があった，と言われるけれども，「クズバス年譜」や「シベリアにおけるオランダ人の建設」の中の（“B.” と姓を変えられての）彼の描写にはそのような「問題」は読み取られにくい。それは両史料とも後年にまとめられたものであるからであろうが，しかしリュトヘルスによるバールスへの職歴証明兼推薦状が 1927 年 3 月 23 日時点で過大なまでの推薦になっていたこと（第 3 篇， 5）は，どう説明できるのであろうか？　やはりケネルが指摘したように，リュトヘルスには経営責任者として「人物を判断できな」い「顕著な弱点」があった（第 6 篇， 19），と言わざるをえないのではないか。

ルース・ケネルについては，彼女のいくつかの記事を同時代証言として本連載論文でしばしば利用してきたが，（最初の 2 年間の雇用期間満了後モスクワに移り，コミンテルン書記局の司書として働き，1924 年 12 月にリュトヘルスの依頼の手伝いでケメロヴォに戻り，そのあとモスクワでの仕事を再開していた[13]）彼女と АИК-К 清算時に再会したリュトヘルスとのエピソードをまず紹介しよう。

ケネルの政治的立場は，既述のように（第 3 篇，35），当初の IWW 支持者への一体感から，1922 年 12 月に締結された「新契約」から生じたリュトヘルスの改革および実用主義的なコロニー体制の受容へと徐々に変わっていき，リュトヘルスとの間に信頼関係が形成されていった。1926 年 12 月 15 日の晩にリュトヘルスは，モスクワのケネル宅を訪れ，自らの管理者としての辞任を伝え，「あなたのために私にできることはあるか」と尋ねた。続けて彼はクリスマス・パーティーを終えたばかりのケネル宅を訪れ，彼女にクリスマス

（11） 既述のように，バールスはシブウーゴリに自らを売り込んで雇用されていた。第 3 篇，5, 8.

（12） これも既述のように，バールスが嫌われる背景には，大戦中蘭領インドの作業現場で下層労働者を高圧的に指揮した体験があった。第 3 篇, 9.

（13） Cf. РГАСПИ, 626/1/13/243; J.P. Morray, *Project Kuzbas. American Workers in Siberia (1921-1926)*（New York, 1983）, 164.

・プレゼントとしてモスクワ事務所に対するニューヨーク行の帰りの運賃支払命令書を手渡して，言った。АИК-К との雇用契約満了者は運賃代を受け取ることができるので，旧経営が 1927 年元旦に終わるため，直ちに事務所に出向き，換金するように，と。ケネルは大晦日に事務所に行ったが，フートの後任のガフトから，リュトヘルスが辞任したあとに署名した命令書には支払えないと断られた。この件で（上述したのと同様に）中央統制委員会からガフトは訴えられ，有罪判決を受けることになった[14]。このリュトヘルスの行為は，既述した（第 6 篇, 8）清算時の残務処理の 1 例だった。

アメルスフォールトに戻ったリュトヘルスは，恋愛沙汰と夫婦間の問題で悩むケネルからの相談の書簡に対して 1927 年 7 月 31 日に返書を出した。「私はあなたがすでに US に逃げ戻ったのではないかと恐れた。もしもあなたのポケットに帰りの切符が入っていないならば，そこに行ってはいけない。……あなたは様々な時期にクズバスで大いに我々を助けてくれた。もしもあなたが今家族のトラブルを抱えているならば，これは一部はあなたがヨリ大きな家族に属しているからである」。ケネルはこの最後の文章を以下のように晩年回想している。「彼の物事に寛容で，非個人的な見方の前では，個人的なトラブルへの私自身の執着は恥ずべきもののように思えた。……私は今かつてより以上に大義に関わり合い，そして役立つことを切望した」[15]。これを機にケネルは，国立出版所の英-米セクションで編集を手がけ，ドライザー（Th. Dreiser）の作品の序文を書き，そして彼の 77 日間の訪ソ時の秘書兼通訳を務め，「世界で最初の社会主義社会のための 1 十字軍士」としての情熱を完全に回復させた。「コロニーの全事情に関しておそらく最も多作のアメリカ人作家」とスミスに評されたように[16]，ケネルの「クズバス」記録作家としての仕事は晩年まで続けられていく。

ここで，リュトヘルスが直接ないし間接的に入植に関わったオランダ人たちについて補足説明をしておこう。

オランダ人技師が果たした役割について，АИК-К 前半期に参加したスパークス（N. Sparks）は以下のように回想している。リュトヘルスが半ダースの〔最終的には約 2 ダースほどになる〕オランダ人を連れて来た。アメリカ人は，いく人かのオランダ人がロシア人だけでなくアメリカ人も軽蔑し，自分たちの優越性を固く信じていることに気づいてい

（14） Ruth E. Kennell, “Lenin Called Us: A Kuzbas Chronicle,” *New World Review*, Vol. 39, No. 4, Fall 1971, 94-95.

（15） Sebald J. Rutgers（Amersfoort）to Ruth［Kennell］, 31.VII.1927［the original is not ascertained; copy donated by Hans Olink］; Kennell, “Lenin Called Us,” 95. この「家族のトラブル」については，以下が非常に良く調べて，明らかにしている。Julia L. Mickenberg, *American Girls in Red Russia. Chasing the Soviet Dream*（Chicago/London, 2017）, Ch. 3（“A New Pennsylvania”: Seeking Home in Siberia）.

（16） W.Th. Smith, The Kuzbas Colony Soviet Russia 1921-1926. An American Contribution to the Building of a Communist State（Doctor of Arts in History diss., University of Miami, 1977）, 244.

くぶん不意を打たれた。しかし，これらの態度はすべて水をかすかに濁らせたとはいえ，彼らは深刻に仕事を妨害は決してしなかった。それからまた，いく人かは個人的にロシア人とアメリカ人との，アメリカ人とオランダ人との，共産者と非共産主義者との関係を円滑にする彼らの努力と能力において際立っていた[17]。

この役割は，おそらく АИК-К 後半期にも続いたのであろう。オランダからの入植者は夫婦同伴が多く，家族ぐるみのつきあいをしてまとまりがあった[18]。そして既述したように，АИК-К 清算直前に病気に苦しんでいたリュトヘルスをストライク，ベーゲマン，シャーマーホルンらオランダ人が支援した。ガルキナはオランダ人の目立つ役割にもかかわらず，彼らの人数（25 メンバー）が相対的に少なかったことの説明を次のようにしている。それは 1925 年 12 月の外務人民委員部の親書（外務人民委員代理リトヴィノフ〔M.M. Литвинов〕のリュトヘルス宛）の中にあった。つまり，外務人民委員部は「オランダはソヴェト社会主義共和国連邦（CCCP）と通常の関係を回復していないので，長期にわたる労働にオランダ人を組織的に招待することに反対する」と[19]。

最後に，オランダ人技師の中でリュトヘルス，バールス，ストライク，シャーマーホルンらがデルフト工業専門学校（1905 年から工科大学）出身者であることについて補足する。世紀転換期のオランダ，とりわけデルフトにおいて技術学校出身者と社会改革運動，更には社会主義とのつながりは決して珍しいことではなかった。「赤いデルフト」と呼ばれた時代の学生運動が「社会主義の発祥地」の 1 つになっていた[20]。

（17） N. Sparks, “Lenin and the Americans at Kuzbas,” R.S. Cohen/J.J. Stachel/M.W. Wartofsky (eds.), *For Dirk Struik. Scientific, Historical and Political Essays in Honor of Dirk J. Struik* (Dordrecht/Boston, 1974), 628.

（18） Cf. Галкина, *АИК-К*, 80-81.

（19） Галкина, *АИК-К*, 81.

（20） 山内昭人『リュトヘルスとインタナショナル史研究 ── 片山潜・ボリシェヴィキ・アメリカレフトウィング ── 』（ミネルヴァ書房, 1996), 25, 27-28.

終章　総括に向けて

1　その創設に関する新解釈

АИК-К 創設のための審議が半年近く長引いた主原因は，これまで研究者によって強調されてきた政府からの莫大な資金援助の是非等ではなく，そのコロニーをどちらが管轄するか，リュトヘルスが審議中一貫してその重要性にこだわっていた「自治」をどちらがヨリ保障してくれるか，をめぐる意見対立にあった。つまり，一方はレーニンが主宰する上位の CTO であり，もう一方は外国資本家への利権提供を推進し，コロニーもまた「商業ベース」で運営されるべきであると主張していた BCHX であった。結局，コロニーは CTO の管轄下で創設されることに決まったのだが，CTO はコロニーの創設および運営に具体的に関わる専門委員会である BCHX に事前検討を委ねてきており，まさにそのことゆえに BCHX からのコロニーへの「介入」の試みは創設後も避けられなくなる。その管轄をめぐる両者の意見対立が創設後も尾を引くことになることが最後に見通された。

2　時期区分の問題

АИК-К の時期区分

ガルキナによる時期区分 [1]	山内による時期区分
①創設期（**1921 年 10 月 20 日～ 1922 年 8 月**） 「サンディカリスト的傾向の優勢によって特徴づけられた」	①創設の提案から承認へ（**1921 年 6 月 12 日～ 11 月 22 日**） ○アメリカ組織委員会の設立とその運営（1922 年 1 月 2 日～ 1923 年 3 月）
②準備期（**1922 年 8 月～ 1923 年 3 月**） 「ウォブリーズの影響力の弱体化によって特徴づけられた」	②操業準備から新契約締結後の再出発まで（**1921 年 11 月 16 日／ 1922 年 1 月～ 1923 年 2 月**） ○ニューヨーク事務所の再編からその解散へ（1923 年 4 月 1 日～ 1927 年 2 月 1 日）
③ケメロヴォ地区での運営期（**1923 年 3 月～ 1924 年 12 月**） 「共産主義者の立場の強化及び最高速度の発展で際立った」	③本格操業から事業規模拡大まで（**1923 年 3 月 1 日～ 1924 年 12 月**）
④拡張されたコロニーの活動期（**1925 年 1 月 1 日～ 1926 年 12 月**） 「ロシア化の強化」「通常ソヴェト企業との間の相違の除去」	④事業の更なる発展からその清算へ（**1925 年 1 月 1 日～ 1926 年 12 月**） ⑤清算後（**1927 年 1 月 1 日～ 1928 年 2 月**）

最初に時期区分の問題を取り上げる。АИК-К 全期にわたる時期区分は，ガルキナによって提示されている。それを上記の表の左欄に，そして右欄には私による時期区分をそれぞれ掲げる（私の時期区分は本連載論文の各副題に基本的に沿っており，改めての説明は必要ないであろう）。

ガルキナは各時期について短い注釈だけを加えている（表中に特徴的な抜粋をそれぞれ引用している）。それらを見れば，ガルキナの主たる関心は АИК-К の事業自体の発展にはなく，あくまでも党派的であり，ウォブリーズと共産主義者との争いに向けられすぎている。しかも行き着く先は（ガルキナが考えるところの）「ロシア化」が当然という前提でしか実態を見ようとしていない。АИК-К が（どこと誰たちと交渉したり争ったりして苦労しながら），実際どのように事業を発展させていったかが，それぞれの注釈にもとづくその時期区分では把握されにくい。

3　IWW 的傾向という解釈の問題点

繰り返し言及してきたように，АИК-К の IWW 的傾向を史実以上に強調して，批判的に論じる研究者があとを絶たない。それらに反論するため，ここでまとめて論じることにする。

①大衆集会 対 技術的「効率」

「下からの批判などの自由」を保障する制度としてとりわけ IWW 支持の入植者に重視されてきた「大衆集会」には問題があった。例えば細部の技術的問題をその集会で決めることの非効率を，リュトヘルスは現地到着早々に取り上げ，大衆集会の不備を「一定の規律」を導入して改善しようとした。その試みは IWW 支持者の反撥を招いたけれども，リュトヘルスがこだわったのは生産のための技術的「効率」の問題，つまり専門技術者による産業経営の不可避性である。そのことを当の IWW 機関誌（*Industrial Worker*）に載り，『クズバス』に転載された論文「労働者管理」の中の「生産に関する限り，プロレタリアートの独裁よりはむしろ専門技術者のある種の独裁になるかもしれない」という主張が後押ししていたのである。リュトヘルスによる大衆集会への批判的対応および生産における技術的「効率」の重視は，IWW 的コロニー運営への有効な批判となった。

②ウォブリーズ・グループの夢と現実

コロニーには有力なウォブリーズであった（早々と離脱を余儀なくされたバイアー〔J.H. Beyer〕とキャルヴァート〔H.S. Calvert〕を除き）ヘイウッド（W.D. Haywood），バーカー，ベルグ（S. Berg），マスケヴィチ（J. Masukevich）らがいた。現地管理者として赴任

（1） Л.Ю. Галкина, Создание и деятельность автономной индустриальной колонии иностранных рабочих и специалистов (АИК) в Кузбассе (1921-1926 гг.). Автореферат диссертации.....кандидата исторических наук（Кемерово, 1997）, 24-25.

したヘイウッドは，後任のリュトヘルスによって上記大衆集会の運営で批判されて，早くもモスクワに戻るしかなかった。彼らが АИК-К の方針転換に関してグループとして管理者リュトヘルスと唯一全面的に争ったのは，АИК-К がネップ下の経済発展に沿う制度改変を受け入れるかどうかについてであった。けれども彼らの主張は，ソヴェト・ロシアの経済復興への貢献をいかにして果たせるかという現実問題に直面して説得力を持ちえなかった。彼らはリュトヘルスによる管理体制に対していわゆる力で反対したわけではなく，ましてやガルキナらが強調する「共産主義者」と対立する次元の話では決してなかった。ニューヨーク事務局代表だったバーカーが 1926 年半ばに訪ソしてリュトヘルスと意見を戦わせた際に，後者は前者の「サンディカリズム的〔IWW 的〕傾向」に疑念を抱いたとのことだが，その傾向とは АИК-К の創設理念と原則にこだわり続けようとしたものであった。そのこだわりだけで現状維持以外の提案がなされないような彼らの主張は，制度を改変してまでも更なる発展をめざしていた АИК-К に受け入れられる余地はもはやなかった。しかし，彼らには主観的に「利益追求制度下で試みることができない」この国際的な一大社会「実験」に何らかの願望を託すものが依然あった。それゆえに彼らは清算まで АИК-К との関係を断つことはなかった。

③共産主義者の「敵役」（counterpart）としてのウォブリーズ

これまで私は，アメリカの研究者スミスやモレイによる IWW に肩入れしがちな評価の方向性や「共産主義者対ウォブリーズ」という二項対立的な解釈にこだわりすぎる傾向性は，再検討されるべきであり，入植者たちの思想と行動を分析する際，党派的な色分けにこだわりすぎることは，かえって実態把握を妨げかねない，と主張してきた。そのような傾向性が（逆の評価であるけれども）ガルキナらロシア研究者にも目立つのは，なぜだろうか？　当時最も重要な対立は，ソヴェト・ロシア政府諸機関（ВСНХ，ゴスプランなど）と「自治コロニー」АИК-К との間にあった。がしかし，それは「論敵」同士というものであって，当時の苦しい経済・財政状況もあり，論争は不可避であった。実は，もう 1 つ深刻な対立があったのであり，それはロシア人スペッツによる敵対行為が引き起こした争いだった[(2)]。この争いを調査した СТО〔調査〕委員会議長ラストプチン（Н.П. Растопчин）が後年公にした回想を引用すれば，こうである。調査委員会の委員になった所管官庁スペッツは，調査報告に公然と反対し，「クズバス・トラストの実際に自らを正当化しなかった管理・運営システムを曖昧にし，そして АИК-К 企業の成果を過小評価し，隠蔽する傾向が透けて見え」た。その「スペッツとの闘争」は，リュトヘルスにとって，彼らの「誹謗中傷あるいは虚偽の申し立てを政治的犯罪とみなす」ほど深刻な問題であった。ロシア研究者は前者の対立＝論争に対して，私が解明してきたように，時として曖昧な記述で済ませてきた。そして後者の対立＝闘争に対しては，正面から取り上げることはなく，上記ラストプチンの回想文に匹敵する表現は彼ら研究者の中に見出せない[(3)]。ロシア研究者は

---

(2)　クズバスの場合，彼らスペッツは大概ロシア革命前に投機的な目的で旧フランス人が利権（採掘権）を持ったいくつかの炭鉱の技術スタッフであった。РГАСПИ, 626/1/9/6-7.

(3)　タルレだけは珍しく，『軽・重工業の工場史』の準備段階の 1934 年にリュトヘルスが 1

これら 2 つの対立を重視せず，それらの対立から目を反らせるために「敵役」としてウォブリーズを史実以上に重視し，共産主義者との対立を強調したのではないか。

4　「自治」と「特性」の保持

そもそも最初の「計画案」に「労働者コロニーが自らの業務を管理する自由裁量を得ることは絶対に必須であろう」と謳われた。リュトヘルスもまた，『クズバス』創刊号の巻頭論文の冒頭で以下のように謳った。「『自治』コロニーは，最高度の〔生産〕効率を可能にするためにソヴェト当局が十分に自由裁量を保証したことを意味する。それ以上のものではない」。АИК-К の大義であるソヴェト・ロシア経済の復興・発展への貢献のためには，技術的にも社会的にも「効率」の向上こそが不可欠であり，そのためにはまた自由裁量の保証，すなわち「自治」が求められた。

そのように確立された原則の下にスタートした АИК-К は，前例のないプロジェクトゆえに様々な困難に遭遇しながらも徐々に発展していった。その「効率」を高めながら更に発展してその大義を実現するためには，独自路線を歩みつつある АИК-К への積極的な支援がソヴェト・ロシア政府諸機関に求められていた。が実際には，その支援が得られにくくなった以上，АИК-К の方がネップ下の経済発展に沿う制度改変は避けられなかったし，実際その方向性しか АИК-К の更なる経済的発展の選択肢はなかったろう。当初リュトヘルスが夢描いていた新しい労働者国家（或る入植者の表現では「新労働者共和国」）の形成は消え果て，残るは АИК-К 組織内での「自治」にもとづき，生産の技術的「効率」を可能な限り高めながら，ネップ下で自らもいかに経済発展をめざしていくかだけであった。

まず最初に，АИК-К の司令部が売買のために流通の中心であるモスクワに置かれることになった。そのことはまた，「自治」の用語によって何を意味するかを明確に定義づける必要が出てきた。多くの入植者（ヘイウッド，ベルグ，マスケヴィチ，バーカーら）は，あくまでロシア諸制度の枠組み内での組織の自治としてではなく，産業内の彼らの行動における個人の認可（ライセンス）および個人の行動の自由として自治を解釈してきた。この解釈の結果として，大衆集会によって АИК-К の操業や技術的問題に決着をつけることに努力が払われた。彼らの解釈・主張は，創設理念にこだわり続けようとしていたものだが，リュトヘ

作家による 8 回にわたるインタヴューを受け，それが速記された回想に言及している。タルレによれば，その回想の意義は「再評価するのが困難である。速記録資料は，他のもう 1 つの史料集成を本質的に追加しており，読者をクズバスにおけるコロニー組織の敵対者との緊張した作業と闘いの雰囲気へと導く」。Тарле, *Друзья страны Советов*, 24-25.　文面からは，タルレがロシア人スペッツとのリュトヘルスの疲弊する争いを再認識したことは間違いない。にもかかわらず，タルレはその問題に正面から向き合うことを回避したとしか言いようがない。

ルスの主導により АИК-К がネップ下の経済発展に沿う制度改変を受け入れることになる激論の中で説得力を持ちえなかった。その時，リュトヘルスには「今の管理機関の中には様々な意見の相違があり，それが実際の生産への準備のための作業にブレーキをかけるであろう」と CTO 宛書簡にあるように，その内紛が生産の「効率」に響き，ひいてはソヴェト・ロシア経済復興への貢献という大義のために支障をきたしかねないという考えがあった。

実はネップ経済体制への適応に方針転換した際，АИК-К は経営委員会の改変およびその委員選挙権の暫定移譲に関してソヴェト・ロシア政府への依存度を高めてしまった。組織内部でも現物支給に代わってロシア賃金制度が導入され，更に給料の 60 %供出システムが廃止されるなど，АИК-К は創設時とは徐々に様変わりしつつあった。

その流れは，ガルキナに表現を借りれば，「利権を特別に付与された自主運営システム」から「中央集権的な管理統制システム」への移行を指すことになるのだが，当事者間では「コロニーのロシア化」と呼ばれた。ガルキナにとっては，その「ロシア化」は当然視され，АИК-К がロシアの通常の「商業トラスト」に変わることによって，つまりロシア全体の経済システムに組み込まれる（と言うことは АИК-К は CTO から BCHX の管轄下に置かれる）ことによって，ようやく本格操業が始まったとしか見られない。リュトヘルスにとっては，АИК-К の「孤立化」は危険な実験であり，「ロシア化」徹底の流れはもはや避けられないけれども，徐々に外堀を埋められつつあった「自治」があくまでも「特性」というかたちで保持されることが必須条件であった。具体的に記せば，「入植者たちが貫き通してきたすべての進歩的で合理的なもの」，「管理上最小限の職員数〔外国人スタッフ〕による高い指導効率」，「統計・管理システムと最新の生産方式の導入との組合せ」，そして CTO への上訴権の保持であった。結局，それらの条件も受け入れられず，最悪にも АИК-К の清算・再編で決着がつけられた。病を抱えながらリュトヘルスが「自治」の最後の砦であった「特性」の保持と，それを保障する外国人スタッフの引き留めに最後までこだわったことの重要性が，これまでどの「クズバス」研究者にも決して認められることはなかった。

なぜその重要性が彼らに認められなかったのか，をここで問うことにしたい。それはひとえに一番の当事者であったリュトヘルスが書き残した文書類を精査しなかったからである。彼らがリュトヘルスの著作で利用したのは，1935 年公表した回想「レーニンとの会見」や『クズバス』掲載論文・報告程度にすぎない。リュトヘルス文書がリュトヘルスの娘（G.C. Trincher Rutgers）からマルクス-レーニン主義研究所（現ルガスピ）に寄贈されたのは 1983 年 1 月 31 日であり [(4)]，タルレらは閲覧できなかったかもしれないが，ガルキナをはじめ現在の研究者は閲覧できるし，現に私はそれらを本連載の主要典拠としている。もちろん私が活用したリュトヘルス文書類は，改めて CTO などの会議議事録およびリュトヘルスがその都度提出した報告書類によって裏を取る作業が残されており，それは後続の研究者に託したい。

（4） 山内『リュトヘルスとインタナショナル史研究』，10.

5　リュトヘルスの評価をめぐって

入植した秘書ヘレン・ウィルソンと医師エルシー・ミッチェルが АИК-К 清算後帰国して間もない時期に寄稿した現地報告は，食事，医療など日常生活にまで及び具体的で，時に詳細である[(5)]。しかし，それはあくまで彼女たちが見聞きして知った限りのものであり，リュトヘルスを「独裁者」（dictator）と一貫して厳しく見て，「独裁者の職が降りてきた男が，1 オランダ人であったことは遺憾なことに思えた。合州国での彼の短い居住は，すべてのアメリカ的なもの，特に民主主義への嫌悪と不信を結果として招いてしまった」云々と決めつけている。また「我々のオランダ人管理者は，入植者を理解するのに全く成功しなかった」と言い切ってさえいる（リュトヘルスが頻繁に現地を離れ，ソヴェト関係諸機関との交渉に精魂を傾けざるをえなかった事情を，彼女たちはどれほど理解していたのだろうか)。その「独裁者」としてのリュトヘルス評価を，スミスは引き継いだ[(6)]。

これに対して，前半期の入植者だった技師スパークスは，以下のようにリュトヘルスを評価した。「彼〔リュトヘルス〕は〔現地で〕指揮する経営委員会の唯一の人であり，たとえ同意なしでも，少なくとも企業のすべての方面からわずかながらも必要な尊敬を得られていた」[(7)]。ここで注意を払うべきは，高い評価があるものの，「たとえ同意なしでも」との留保があることであり，それはリュトヘルスへの評価でしばしば指摘されてきている「官僚主義的」あるいは「中央集権的」管理者と言うべき特徴があったがゆえの留保であり，多くの場合は批判的に扱われている。しかし，リュトヘルスにとっては，大衆集会の不備を補う「一定の規律」の導入や生産の技術的「効率」の向上をめざしての「専門技術者の独裁」と見られてもやむを得ない対応のように，「上からの」管理・指導は時として避けられなかった[(8)]。

このことに関連して，研究者ポーラ・ガーブがスパークスによる評価を更に敷衍したかたちで以下のように総括しており，それは少なくとも 1923-24 年時点では妥当であったろ

---

(5)　Hellen C. Wilson/Elsie R. Mitchell, “A Light-running Utopia. Kuzbas-American Colony in Siberia, ‘Liquidated’ because of Internal Friction,” *Asia*（New York）, Vol. 28, No. 12, XII.1928, 955-962, 1034-1038.

(6)　Smith, The Kuzbas Colony, 193-194.

(7)　Sparks, “Lenin and the Americans at Kuzbas,” 625.

(8)　前書ですでに私は論じたのだが，リュトヘルスには，レーニンの「左翼小児病」批判を受け入れたように（山内昭人『第 3 インタナショナルへの道 ── リュトヘルスとコミンテルン創設 ── 』〔九州大学出版会, 2021〕, 310-311; cf. 第 1 篇, 26)，事を成し遂げるためには中央集権的で官僚主義的な組織や運営が不可欠であった。その側面が管理者として指導力を発揮するのに役立つ面が確かにあったけれども，もう 1 つの「下からの批判と管理が大いにできる自由」あるいは「自治」の堅持がそこでは保障されるべきであり，両者は不可分である，とリュトヘルスには捉えられていた。

う[9]。リュトヘルスは「些細な日常の諸問題をめぐる果てしない会議や言い争いをやめさせた。どんな問題でも集団によって決定されるべきだと信じる多くの労働者の不満に対して，リュトヘルスは自らが決定を下し，彼らが問うまでもなく従うべきだと主張した。コロニーにとって幸いなことには，彼は正しい決定を下した。彼はたいへん尊敬されるようになったので，彼が 1925 年〔初め〕に〔健康を害して〕去ることを求めた時にはすでに誰も彼が行くのを見たくなかった。彼は厳しかったが，しかし公正であり，最も重要なことだが，すばらしい経営者であった」。

6　清算後の発展から見た評価

АИК-К 清算後の経済発展から見ての評価に関しては，どの研究者の評価もほぼ一致している。清算から間もない時点での例を 2 つ挙げよう。

ケネルは言う。「入植計画あるいは社会的実験としてみなされるならば，クズバスは失敗であった。しかし，産業的企てとしてならば，それは成功したし，その仕事は生き続けている」[10]（この二分して割り切って捉えることの問題は後述する）。ウィルソンとミッチェルは，こう評価する。ケメロヴォ炭鉱の近代化と化学工場の完成という 2 つの目的は達せられ，後者によってウラル地方の製鋼所全体で使われるコークスを供給できるようになった。旧 АИК-К の「プラントは，ロシアの産業システムへの実質的な貢献として存続している」[11]。

その貢献度は更に第 2 次世界大戦時に高まった。ドイツ軍によるドンバス侵攻で，ソヴェト連邦は石炭産出量の 6 割以上を失った。しかし，1943 年にケメロヴォは 2,500 万トンの石炭を産出した。化学プラントはナチス占領下でソヴェトの手中になおある唯一のコークス・プラントであり，それは 2,000 企業にコークスを供給した[12]。そこまでの貢献を果たしえるほどの経済発展をすでに遂げていたのは，以下に挙げる АИК-К の操業規模拡大への積極姿勢があったからではないか。① АИК-К は早い時期から周辺地域の企業併合を実現していき，テリベス計画に至るまで全クズネツク炭田の管理統合を一貫してめざした。②元々 АИК-К はクズバスと北ウラル（ナジェジンスク工場）における産業労働者コロニーとして構想されたのだが，その承認が危ぶまれていた 1922 年秋時点でリュトヘルスはいわゆる「ウラル-クズネツク・コンビナート」計画をゴスプラン幹部会会議で先駆的に説いていた（それは第 1 次 5 カ年計画以降に実現していく）。わずか 5 年間（国内戦の混乱からようやく抜け出しつつあったものの，極寒地等の悪条件下）で АИК-К によって経

（9）　Paula Garb, *They Came to Stay. North Americans in the U.S.S.R.*（Moscow, 1987）, 22; 第 3 篇, 34-35.

（10）　Kennell, “The End of Kuzbas,” 172.

（11）　Wilson/Mitchell, “A Light-running Utopia,” 1038.

（12）　Kennell, “Lenin Called Us,” 97.

済発展の礎が築かれていなかったならば，そのコンビナートが第 2 次大戦中にそれほどまでに国の経済を支えることができたかは疑わしい。それを可能にしたという意味で，「シベリアの小インタナショナル」として始まり，一大産業事業を創造した АИК-К の評価は揺るぎないであろう。

7　理想主義の看板倒れであったのか？

かつてソヴェト・ロシア史の大家 E.H. カーが АИК-К を以下のように痛烈に批判したことは良く知られている。「このとき〔1921 年秋〕，西シベリアのクズバス鉱業地域の利権が，アメリカ資本の投資家としてではなく労働者国家の建設に参加することを切望する熱狂者としてソヴェト・ロシアにやってきたアメリカの技師および労働者のグループにあたえられたのである」。「数年間だらだらつづいたこの実験の完全な始末書はいまでも書く必要がある」[13]。果たしてそれほど容易に決めつけられるようなものであったのだろうか？本連載を終えるにあたって連載最初の冒頭に掲げた「国際労働者連帯にもとづく一大事業は，果たして理想主義の看板倒れであったのか？　そうだとすれば，何が問題だったのか？」という問いに答えよう。

АИК-К は①ソヴェト・ロシアの経済的復興への貢献と②国際的連帯にもとづく「自治」を原則とした社会的実験および創造の実現をめざしてスタートした。ただし，①の追求が大義であったために，①が危ぶまれることになれば，②の追求はどうしても二の次とならざるをえず，2 つながらともに実現しがたいディレンマに АИК-К は立たされた。そこに根本的な問題＝無理があった。けれども，当時クズバス・プロジェクトへの参加を動機づけた決定的な要因として，リュトヘルスは 1950 年代の回顧の中で以下の 2 点を挙げている。(a)「資本主義を打倒し，社会主義を建設する社会的実験のための資本主義国における労働者と技術者の中での熱情」，(b)「資本主義世界における抑圧から解放された時，近代技術の全能性への過大評価」。そして「それらが成功と最終成果を説明するのと同様にまた困難と失望を説明する」と捉えた[14]。要するに，②のとりわけ「社会的実験のための熱情」があったからこそ，（アメリカ人たちは「金を稼ぐために来ていないので，彼らを土地に引き留めるためには彼らの仕事の拡大が展望されなければならないだろう」と「クズバス年譜」に記されたように）上記の操業規模拡大への積極姿勢が貫かれ，①への貢献がヨリ確たるものになったのである。

その一方で，ソヴェト・ロシア政府にとっては，①のために АИК-К に期待し，資金援助をしたのであり，ネップ体制が確立されるにつれて，①は自らによって，つまり АИК-К

（13）　E.H. カー『ボリシェヴィキ革命 1917−1923』（ソヴェト・ロシア史 第 3 巻）宇高基輔訳（みすず書房, 1971）, 268.

（14）　Autonomous Industrial Colony Kuzbas（A.I.K. Kuzbas）, in: РГАСПИ, 626/1/9/5（強調は引用者）.

を「ロシア化」することによってこそ果たされると考えられるようになった。そこにもう 1 つの問題が出てきた。その「ロシア化」が急速に進められ，最終的に②の追求は挫折に追いやられていった。

АИК-К は②を実現できなかった。その意味では「理想主義の看板倒れ」であったという評価は覆されにくい。АИК-К は幹部スタッフ不足，求める「理想主義」に関する考えや受けとめ方の違いによる内紛，ブロンカの死やリュトヘルスの病気療養など内部の問題を抱えながらも，「コロニーは，ソヴェト管理者の命令下よりも自分自身の経営によって操業される時，ヨリ高く効率的であったことは，明らかである」とガルキナによってまとめられたように，高い生産能力を発揮していった。そのような АИК-К が更に経済発展（例えば石炭やコークスほか化学製品の販路拡大）を遂げるためには，ロシア全体の経済システムに入り込まざるをえず，そのことがソヴェト・ロシア政府側にとっては АИК-К の「ロシア化」を促進する好条件と見られていった。АИК-К 内には②のためにも「ロシア化」に反対して「孤立化」を唱える意見も少なくはなかったけれども，リュトヘルスは「ロシア化」への拒絶はかえって①を困難にし，「ロシア化」はもはや避けられないと受けとめるものの，②のために不可欠な「特性」を保持する外国人スタッフの引き留めを最後の条件とした。結局，ソヴェト側によってその条件でさえ見過ごされたことは，そこに「理想主義」に淵源する最後の条件をも受け入れなかったソヴェト側に本質的な問題があったのではないか。ロシア人スペッツだけでなく，ソヴェト・ロシア政府関係諸機関でも，外国人の手を借りずに自分たちでやっていける，と言うような「国際労働者連帯」に反する感情が時に表出されていたことが，最後に思い起こされる。

1921 年 9 月 30 日の荒れた CTO 会議の中でレーニンが「親愛なる同志リュトヘルスよ，興奮だけはしないで，私はあなたにいくらかの自由だけでなく，〔組織内の〕完全な自由を約束する」（第 1 篇， 17）と言った時から，いかに遠くへリュトヘルスたちは来たことか。

2025 年 8 月 4 日　成稿・初版

The Autonomous Industrial Colony "Kuzbas" and S. J. Rutgers (7): The Aftermath of Its Liquidation and Toward the Conclusion

by

Akito YAMANOUCHI

(Professor Emeritus of Kyushu University)

Previous researches have only touched on the reorganization of "Kuzbassugol" and the downfall of K.N. Korobkin after the liquidation of the Autonomous Industrial Colony "Kuzbas" (AIC-K), but this article has newly revealed that even after its liquidation S.J. Rutgers, with the aid of Begemann, attempted to retain foreign engineers leaving and promote the next plan "Tel'bess," hoping for a glimmer of hope. In the end, Rutgers' efforts did not bear fruit. The possible reasons are as follows: (1) The successor manager, Kotin, did not oppose the plan "Tel'bess" from the outset, but he constantly interfered in technical issues and did not get along well with Begemann; (2) Top engineers had left Kemerovo, making it difficult to proceed with the plan; (3) It was difficult for Begemann to take over negotiations in Moscow in place of Rutgers.

Next, the aftermath of the leading staff who worked for the AIC-K until the end was briefly described. Many of them continued to work in undertakings similar to Project Kuzbas in Soviet Russia, or returned to their home countries and found new jobs, but they still believed in and had high hopes for "a new Kuzbas."

Here, a supplementary explanation was given about the Dutch engineers. N. Sparks, who participated in the first half of the AIC-K, recalled the role played by them as follows: "Besides the Americans, Rutgers had brought out half a dozen Dutch engineers [in the end, there were about two dozen]. The Americans were somewhat taken aback to find some of the Hollanders contemptuous not only of the Russians but of the Americans also, and convinced of their own superiority. But while all these attitudes muddies the waters slightly, they never seriously hindered the work. Then, too, certain individuals stood out in their efforts and ability at smoothing relations between Russians and Americans, Americans and Dutch, Communists and non-Communists." This role probably continued in the second half of the AIC-K. It should be noted that among the Dutch engineers, Rutgers, A. Baars, A.G. Struik, D. Schermerhorn and others were graduates of Polytechnic School of Delft (Technical College of Delft from 1905). At the turn of the century in the Netherlands, especially in Delft, it was not uncommon for graduates of the Technical School to be connected to the social reform movement and even socialism. The student movement in the period of the so-called "Red Delft" became one of the origins of socialism in the Netherlands.

In the final chapter, a summary has been made toward the conclusion. However, I would like

to point out that in this series, each Part is summarized briefly, and in summarizing it here (although it has been newly re-edited), those summaries are repeated to a certain extent.

1 A new interpretation on its foundation

The main reason why the deliberations for the foundation were prolonged for nearly half a year was not the merits or demerits of the enormous financial support from the Soviet Government, as researchers have emphasized so far, but the disagreement over who should have jurisdiction over the Colony and who should better guarantee its "autonomy" that Rutgers stressed the importance of sticking to during the deliberations. One side was the Soviet of Labor and Defense (STO), an upper organ which was presided over by V.I. Lenin and legally authorized as commission of the Soviet of People's Commissars, and the other was the Supreme Soviet of National Economy (VSNKh), a lower organ which promoted the provision of concessions to foreign capitalists and insisted the Colony should also be operated on a commercial basis. In the end, it was decided that the Colony would be founded under the jurisdiction of the STO. But the STO had entrusted preliminary consideration to the VSNKh, a specialized committee specifically involved in the foundation and management of the Colony, and for that very reason, attempts by the VSNKh to "intervene" in the Colony would be unavoidable even after its foundation. It has ultimately been foreseen that the disagreement between the two sides over its jurisdiction would continue.

2 Problems with periodization

The Division of the AIC-K into Periods

The Division into Periods by L.Iu. Galkina	The Division into Periods by A. Yamanouchi
① Organizational period（**20.X.1921 ～ VIII.1922**） ".....characterized by the predominance of the syndicalistic mood in the colony"	① From Proposal to Approval of the Foundation（**12.VI.1921 ～ 12.XI.1921**） ○ Establishment of the AOC and Its Operations（2.I.1922 ～ III.1923）
② Preparatory period（**VIII.1922 年～ III.1923**） ".....characterized by the weakening of the influence of the Wobblies"	② Preparation for Operations till Restart with the New Contract（**16.XI.1921 / I.1922 ～ II.1923**） ○ From Reorganization of the NY Bureau to Its Dissolution（1.IV.1923 ～ 1.II.1927）
③ Managing period in the Kemerovo district（**III.1923 ～ XII.1924**） ".....distinguished by the strengthening of the position of communists and the most highest tempo of development"	③ From Regular Operations till Expansion of Enterprise Scale（**1.III.1923 ～ XII.1924**）
④ Active period of the expanded colony（**1.I.1925 ～ XII.1926**） "the strengthening of Russification; the removal of differences between AIC and ordinary Soviet enterprises"	④ From Further Development of the Enterprise to Its Liquidation（**1.I.1925 ～ XII.1926**） ⑤ Aftermath of Its Liquidation（**1.I.1927 ～ II.1928**）

The division of the AIC-K into Periods is presented by Galkina. I have listed it in the left column of the table above, and my own division in the right column (my division basically follows the subtitles of each Part in this series, so no further explanation is necessary).

Galkina only adds short annotations for each period (characteristic excerpts are quoted in the table). Looking at these, Galkina's main interest is not in the development of the AIC-K's enterprise itself, but is rather partisan and focused too much on the conflict between the Wobblies and the Communists. It is difficult to grasp how the AIC-K actually developed its enterprise from Galkina's division of periods and the annotations.

3 Problems with the interpretation of the IWW tendency

(1) Mass meeting *versus* technical "efficiency"

There were problems with the "mass meeting," which was taken seriously by pro-IWW colonists as a system that guaranteed "freedom of criticism from below." Soon after Rutgers arrived at Kemerovo, he posed the problem with the mass meeting (for example, inefficiency that even the technical details had been discussed and resolved there) and tried to improve the deficiencies of mass meeting by introducing "a certain discipline." Although this attempt drew resistance from IWW supporters, what Rutgers was concerned with was the issue of technical "efficiency" in production, in other words, the inevitability of industrial management by specialized technicians. This was supported by the argument in the article "Workers' Control," which was published in a local organ of the IWW, *Industrial Worker* and reprinted in *Kuzbass*, saying that "Strictly speaking, there is no such thing as 'Democratic Control of Industry,' at least not in the sense of 'Democratic Management'"; "It might, it is possible to imagine, result in some sort of dictatorship of the technician, rather than a dictatorship of the proletariat, as far as production is concerned." Rutgers' critical response to the mass meeting and emphasis on technological "efficiency" in production provided a valid criticism of IWW-style Colony management.

(2) Dreams and reality of the Wobblies group

In the Colony a group of the leading Wobblies (W.D. Haywood, T. Barker, S. Berg, J. Masukevich and others) who kept on adhering to the original "Kuzbas idea" was being formed. The only time this group fought entirely with the Managing Board was over whether the AIC-K should adapt itself to the NEP system and make some institutional changes. Indeed, their argument was not persuasive in heated discussions when faced with the real issue of how they could contribute to the economic reconstruction of Soviet Russia. Because they were so attached to the "Kuzbas idea," they could not propose anything other than maintaining the status quo. But they still left something like a hope for this international social "experiments they could not attempt under the profit-system." They did not fight with the Managing Board on the level of being in conflict with the "Communists" that Galkina and others emphasized. Most members of the group never broke off relations with the AIC-K until its liquidation.

(3) The Wobblies as the "counterpart" of Communists

Why is it that not only American researchers W.Th. Smith and Morray, but also Russian researchers such as Galkina tend to be too fixated on the binary oppositional interpretation of "Communists vs. Wobblies"? The most important conflict at the time was between governmental organs (VSNKh, Gosplan, etc.) and the AIC-K. However, these were "opponents in argument" and disputes were inevitable under the difficult economic and financial situation at the time. In fact, there was another serious conflict, which was caused by hostile acts of Russian "spetsy" (specialists). N.P. Rastopchin, the chairman of the STO [investigative] committee that investigated this conflict, wrote the following in his memoirs, published years later: The "spetsy" of the competent authorities, who became members of the STO committee, openly opposed its [investigative] report and revealed a tendency to obscure Kuzbass Trust's management and operation system, which did not actually justify itself, and to underestimate and conceal the achievements of the AIC-K enterprise. The "struggle with 'spetsy'" was such a serious issue for Rutgers that "their slander or false allegations against the AIC-K were considered political crimes." Russian researchers have sometimes made do with vague descriptions of the former conflict/controversy, and have not directly addressed the latter conflict/struggle, so no description comparable to the above-mentioned recollection by Rastopchin can be found among them. It is likely that Russian researchers have not placed importance on these two conflicts, and in order to divert attention from them, they have placed more importance on the Wobblies as the "counterpart/villain" than the historical fact dictates, and emphasized the conflict with the Communists.

4 "Autonomy" and the retention of the "special features"

Originally, in the first "plan for Industrial Labor Colonial of foreign Workers" addressed to Lenin the following was stated clearly: "It will be absolutely essential that the labor colony gets a free hand to manage its own affairs and to stimulate what energy can be put to further the development." Rutgers also stated the following in the opening article of the inaugural issue of *Kuzbas*: "'Autonomous' colony means that the Soviet authorities have guaranteed a sufficiently free hand to manage their own interior affairs in order to make possible the highest degree of efficiency. No more." In order to contribute to the reconstruction and development of the Soviet Russian economy, which was the just cause of the AIC-K, it was essential to improve "efficiency" both technically and socially. To achieve this, the AIC-K also needed to be guaranteed "a free hand," in other words, "autonomy."

Having started on such established principles, the AIC-K gradually developed despite encountering various difficulties due to it being an unprecedented project. In order to further develop to realize the just cause, the AIC-K needed to obtain any positive support from Soviet governing bodies. However, in reality, since it became difficult to obtain such support, the AIC-K had no choice but to make some institutional changes in line with the economic development under the NEP, and in fact, that would be the only option for the AIC-K. Rutgers' original dream of forming a new Labor State was gone and all that remained was how to aim at accelerating its

economic development by increasing the technical "efficiency" in production as much as possible, on the basis of "autonomy" within the AIC-K organization.

First of all, AIC-K's headquarters was to be located in Moscow as the center of trade. This also required a clear definition of what was meant by the term "autonomy." Many colonists, including Haywood, Berg, Masukevich, Barker, interpreted "autonomy" as individual authorization and freedom of action in their conduct within the industry, rather than as autonomy of an organization within the framework of Russian institutions. As a result of this interpretation, efforts were made to settle AIC-K's operational and technical issues through mass meetings. Their interpretations and arguments, which sought to maintain the founding principles, were not persuasive in the heated debate that led to the AIC-K accepting institutional changes mentioned above. At the time, Rutgers (with Th. Reese) sent a letter to the STO, saying that "within the present Managing Board there are various differences of opinion which will put a brake on the preparatory work for actual production." In other words, Rutgres was afraid that the internal conflict would affect the "efficiency" in production and ultimately hinder the just cause of contributing to the reconstruction of the Soviet Russian economy.

This trend referred to a transition from an autonomous management system with special concessions to a centralized management and control system, and was referred to among those concerned as the "Russification of the colony." For Galkina, this "Russification" was taken for granted, and she could see it as simply the start of full-scale operations, with the AIC-K being transformed into a normal Russian "commercial trust," in other words, being incorporated into Russia's overall economic system (which means that the AIC-K will be placed under the jurisdiction of the VSNKh rather than the STO). For Rutgers, the "Isolation" of the AIC-K was a dangerous experiment and the trend toward strengthening the "Russification" was unavoidable, but the prerequisite was that the "autonomy" which was gradually being weakened be retained in the form of the "special features." To be specific, these conditions were "all the progressive and rational things that the colonists had been adhering to," "high efficiency of instruction with a minimal amount of administrative personnel [foreign staff]," "combining our statistics and management system with the introduction of the latest production methods," and the right of appeal to the STO. In the end, these conditions were not accepted either, and these issues were resolved with the liquidation and reorganization of the AIC-K, which was the worst possible outcome. The importance of Rutgers' insistence to the end on preserving the "special features" that were the last bastion of "autonomy" and on retaining the foreign staff who guaranteed it, has never been recognized by any AIC-K researchers until now.

I would like to ask why they did not recognize the importance of this. This is because they did not thoroughly examine the documents written by Rutgers, who was the person most directly involved. The only documents they used in their work from Rutgers were the memoirs "Encounters with Lenin" published in 1935 and articles, reports, etc. printed in *Kuzbas*. The Rutgers documents were donated by Rutgers' daughter, G.C. Trincher Rutgers, to the Institute of Marxism-Leninism (now RGASPI) on 31 January 1983. While G.Ia. Tarle and others may not have been able to view them, current researchers such as Galkina can view them, and in fact I

have used them as the main sources for this series. Of course, the Rutgers documents I have used still need to be verified again by using meeting minutes of the STO and other organizations and reports submitted by Rutgers on each occasion, and I would like to leave this to future researchers.

5 Over the evaluation of Rutgers

The on-the-spot report that the colonists, secretary Hellen C. Wilson and doctor Elsie R. Mitchell, contributed shortly after returning to the United States after the liquidation of the AIC-K, was specific and detailed. However, it was based only on what they had seen, heard, and learned, and they consistently criticized Rutgers as a "dictator," stating, "It seemed a pity that the man on whom the dictatorship fell was a Hollander. His brief residence in the United States had resulted in a dislike and distrust of everything American — especially democracy." Smith continued this evaluation of Rutgers as a "dictator."

In response, Sparks, an engineer who was a colonist in the first half of the AIC-K, evaluated Rutgers as follows: "He was the only one of the management board that commanded, if not agreement, at least a necessary modicum of respect from all sides at the enterprise." It should be noted here that, although highly appreciated, there is a reservation "if not agreement." This reservation is due to the "bureaucratic" or "centralized" management characteristics that have often been pointed out in evaluations of Rutgers, and is often treated critically. However, for Rutgers, "top-down" management and instruction were sometimes unavoidable, such as the introduction of "a certain discipline" to make up for shortcomings in mass meetings and the unavoidable response of "some sort of dictatorship of the technician" to improve the technical "efficiency" in production. In this regard, Paula Garb expands on Sparks' evaluation by summarizing it as follows, which was probably valid at least in 1923-24: "[Rutgers] put a stop to the endless meetings and bickering over petty daily problems. To the displeasure of many of the workers, who believed every single matter should be decided by the collective, Rutgers began making decisions himself and insisted that they be followed without question. Fortunately for the Colony, he made the right decisions. He became so well respected that by the time he asked to leave in 1925 no one wanted to see him go. He was strict but fair and, most importantly, an excellent manager."

6 The evaluation from the perspective of post-liquidation development

Regarding the evaluation from the perspective of economic development after the liquidation of the AIC-K, the evaluations of all researchers are almost unanimous. Here are two examples from shortly after its liquidation. Ruth Kennell says: "Taken as a colonization scheme or a social experiment, Kuzbas was a failure. But as an industrial undertaking it succeeded and its work lives on." Wilson and Mitchell make this evaluation: "The specific task of completing the chemical plant and modernizing the Kemerovo mines had been accomplished; both were producing and profitable. Our coke was being used in the steel-mills in the Urals..... Some of our successes were not lasting, but the completed, producing plant remains as a substantial contribution to the

industrial system of Russia."

Its contributions increased further during World War II. "When the Germans overran Donbas, the Soviet Union lost over 60 per cent of her coal output. But in 1943 Kemerovo produced 25 million tons of coal. The chemical plant was the only coke plant still in the Soviet hands during the Nazi occupation. It supplied 2,000 enterprises with coke." The fact that the AIC-K had already achieved the economic development required to make such a contribution was likely due to the following proactive attitude toward expanding the scale of its operations: (1) The AIC-K had been merging enterprises in the surrounding areas from an early stage, and had consistently aimed to integrate the management of the entire Kuznetsk Basin coalfield until the Tel'bess plan. (2) The AIC-K was originally conceived as an industrial workers' colony in Kuzbas and the Northern Urals (Nadezhdinsk plants), but in the fall of 1922, when approval of this plan was in doubt, Rutgers pioneered the so-called "Ural-Kuznetsk Combinat" plan at the Presidium conference of the Gosplan (this was to be realized after the first Five-Year Plan).

If the AIC-K had not built the foundations for economic development in just five years (in extremely cold and other adverse conditions, although the country was finally emerging from the chaos of the Civil War), it is doubtful whether the complex would have been able to support the country's economy to the extent that it was during World War II. In the sense that it made this possible, AIC-K's reputation as something that started as the "Little International in Siberia" and created a major industrial enterprise is unshakable.

7 Was it a failure of idealism?

As we conclude this series, let us answer the question posed at the beginning of the series: "Was this great project based on international workers' solidarity really a failure of idealism? If so, what were the problems?"

The AIC-K was started with the aim of **(a) contributing to the economic reconstruction of Soviet Russia** and **(b) realizing social experiments and creation based on international solidarity and the principle of** "**autonomy**." However, since the pursuit of **(a)** was the just cause, if **(a)** was in jeopardy, the pursuit of **(b)** had to take a back seat, and the AIC-K was faced with a dilemma in which both goals were difficult to achieve. Although there were fundamental problems, i.e., difficulties, the two main elements that motivated the colonists to participate in the Kuzbas project at the time were: "The first is the enthusiasm among workers and technicians in capitalist countries for the social experiment to overthrow capitalism and to build socialism. The second may be found in an overestimating of the all-powerfulness of modern technique, when liberated from the restraints in the capitalist world. Together they explain as well the difficulties and the disappointments, as the successes and the final results" (Rutgers' reconsideration in the 1950s). In short, it was especially the "enthusiasm for the social experiment" of **(b)** hat enabled the proactive attitude toward expanding the scale of operations mentioned above to be maintained, and the contribution to **(a)** to be more solid.

On the other hand, the Soviet Government had high hopes for the AIC-K and provided financial support for **(a)**, and as the NEP system was established, it came to believe that **(a)** could

be achieved by the Government itself, that is, by "russifying" the AIC-K. Then another problem appeared. In the wake of Rutgers' prolonged medical treatment and the issue of his deputy selection, the "Russification" progressed so rapidly that the pursuit of **(b)** was ultimately driven to failure.

The AIC-K was unable to achieve **(b)**, and in that sense it is difficult to overturn the assessment that it was a "a failure of idealism." Although the AIC-K had internal problems such as a shortage of senior staff, internal conflicts due to differences in ideas and perceptions of the "idealism" that was sought, and the death of Bronka Kornblitt and Rutgers' medical treatment, it continued to demonstrate high productivity, as Galkina summarized: "It is evident that the colony was much more efficient when operated by its own management than it was under the command of the Soviet director." In order for such AIC-K to achieve further economic development (for example, expanding the sales channels for coal, coke, and other chemical products), it had no choice but to enter the economic system of Russia as a whole, which was seen by the Soviet Government as a favorable condition for promoting the "Russification" of the AIC-K. Not a few colonists opposed the "Russification" and advocated the "Isolation" for the sake of **(b)**. But Rutgers recognized that refusing the "Russification" would make **(a)** more difficult and that the "Russification" was already unavoidable. However, he made the final condition that the foreign staff be retained, as they would maintain the "special features" essential to **(b)**. In the end, the fact that even this condition was overlooked by the Soviet side suggests that there was a fundamental problem on the Soviet side, in that they did not accept even the last condition, which had its roots in "idealism." Finally, it is recalled that not only among Russian "spetsy" but also among governmental organs, sentiments contrary to "international workers' solidarity" were sometimes expressed, such as that they could manage on their own without help from foreigners.

How far Rutgers and his colleagues have come since Lenin said at the turbulent conference of the STO on 30 September 1921: "Dear Comrade Rutgers, don't get too excited, I promise you not only some freedom, but complete freedom [within the organization]"!

Key words: Autonomous Industrial Colony "Kuzbas," STO, VSNKh, Gosplan, K.N. Korobkin, A.G. Struik, Begemann, S.J. Rutgers